平城京右京一条二坊・二条二坊の調査（平城第530次）

奈良文化財研究所は、本庁舎建替事業を進めています。2014年2月より旧庁舎の解体工事を始め、これと併行して4月14日に新庁舎建設予定地を中心とする発掘調査を開始しました。6月末までは敷地南部を対象としており、調査地は平城宮の西面中門である佐伯門の正面で一条南大路が通る場所にあたります。

敷地南部では、秋篠川旧流路を検出しました。旧流路は研究所敷地内を北西から南東方向に流れていました。この旧流路を埋め立てた黒色土に7世紀末から8世紀初頭頃の土器や瓦片が含まれていたことから、旧流路は平城京造営時に埋め立て、付け替えられたことがあきらかになりました。

そして、埋め立ての際には「敷葉（敷粗朶）工法」と呼ばれる古代の土木工法が施されていました。敷葉工法とは、樹木の枝や葉を敷き並べて地盤や盛土を補強する工法で、中国・韓国に類例があり、古代では狭山池（大阪府）の堤や山田道（奈良県）、水城（福岡県）の盛土底部に施されたものが知られています。秋篠川旧流路を埋め立てて大路を造成する際に、軟弱地盤を改良するためにこの工法が用いられたと考えられます。

和銅3年（710）に平城京へ遷都するにあたり、自然河川を付け替える等の大規模な造成工事がおこなわれました。今回の調査成果は、平城京造営にともなう土木工事の実態を知ることのできる重要な成果です。

調査は現在も進んでいます。今後の調査成果にご期待下さい。　　（都城発掘調査部　小田 裕樹）

調査区全景（東から）

平城京左京三条一坊十五坪の調査（平城第534次）

2014年6月3日から7月24日にかけて、店舗新築にともなう事前調査として、平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査をおこないました。調査面積は400㎡。この場所は、有名な長屋王邸跡の西どなりにあたります。過去には今回の調査区の北方を調査しており、その成果から十五坪とその北の十六坪は一体となっていること、四面に庇を持つ大型の掘立柱建物や京内最大規模の井戸のほか、建物群が密に並ぶ敷地であることがあきらかになりました。

今回の調査の結果、南北に庇を持つ東西棟掘立柱建物1棟、東西掘立柱塀1条ないし2条、東西掘立柱建物または東西掘立柱塀1棟（条）、南北掘立柱塀1条を検出しました。中でも東西棟掘立柱建物は、柱掘方の規模が一辺約1.5mと大型である点が注目されます。調査区東端付近で妻柱の柱堀方を検出したことから、この建物の東端がここにあることがわかります。この建物はさらに西に続くものと考えられますが、その規模は、今後の調査に委ねるほかありません。

また、この東西棟掘立柱建物は、これとほぼ同じ場所に位置する東西掘立柱塀よりも後に建てられたことが、遺構の重複関係から確認できました。このことから、奈良時代の中で、この一帯の土地利用において、少なくとも二つの段階があったことがわかります。

出土遺物には、奈良時代を中心とする瓦や塼、土器等があります。平城京の一等地であるこの土地がどのように利用されていたのか、過去の調査とあわせて総合的に検討していきたいと思います。

（都城発掘調査部　庄田 慎矢）

調査区全景（北西から）